

「平和の俳句」

2021年08月16日

「東京新聞」は、今年も8月15日の敗戦記念日に「平和の俳句」を特集している。読者から寄せられた4786句の中から、いとうせいこう氏と黒田杏子氏が、15句ずつを選び、掲載している。心に響いた句を紹介し、考えさせられた感想を少し書きたい。

いとう氏選の4句から。「裏口を開けて子を待つ敗戦忌 中林秋江 (71)」中林氏の伯母の息子さんは鹿児島・知覧から特攻機に乗り、沖縄に向かい帰らぬ人となった。戦死の公報は届いたが、伯母は、万が一にも帰って来た時、入ってこられるように、家の鍵をかけない。中林氏は、息子を待ち続けた伯母の悲しみを受け止め、詠んでいる。S氏は出征したが、戦後数年が経っても消息不明で、家族は戦死と受け止め、葬儀をし、位牌も作った。シベリアに送られた彼は、突然帰って来た。出迎えた母親は、「ちょっと待って」と言い、位牌を片付け、「一緒に風呂に入ろう」と言った。やせ衰えた息子の苦労を全て洗い流したかったのであろう。母親の喜びはいかばかりか。S氏の夫人は、その母に育てられた彼を信じ、結婚したと言われた。結婚したご夫婦は幸せに暮らした。「黒い雨知らぬ若者空青し 小山翔太郎 (12)」原爆投下後、黒い雨が降り、被爆した人々がいる。井伏鱒二が『黒い雨』で、被爆の実態を描いている。76年経ち、ようやく被爆者と認める判決が下された。12歳の小山君は、「黒い雨判決」を知っている。頼もしい少年で、原爆反対を表明する人になるだろう。「平和てふ無限の未来雲の峰 中山精三 (81)」紀元前8世紀、イザヤは、「剣を鋤に、槍を鎌に打ち直す」と、武器を農具に打ち直し、作った農作物を分かち合っ、共に生きると平和を預言した。しかし今日まで、地上に戦争が止むことはなかった。それでも、未来を信じ、永遠の平和を求め続ける。雲の峰を追い求めることが人間の証しであるからである。「『また明日』こどもみんなが言えるよに 釜本紀子 (58)」明日、また会おうと言って別れる穏やかな日常が欲しい。8月は多くの戦争に関するドキュメンタリーを観た。戦争がいかに残酷で、非情であるかを写し出していた。今また、コロナ禍で苦しむ人がいて、心が落ち着かない。平穏な暮らしをしたいと思う。

黒田氏選の4句から。「平和の句金子兜太は生きている 小玉美津江 (82)」金子兜太氏が「平和の俳句」を始められた。俳句は「季語」があり、五七五の短い言葉で、写生する文芸であるが、平和の俳句は季語なしで、平和への思いを詠む俳句道である。金子氏は亡くなったが、彼の遺志は引き継がれている。「戦せず七十六年金メダル 倉島雄太郎 (83)」アジア・太平洋戦争で、日本人は310万人が命を失った。アジアの諸国で2000万人以上が犠牲死している。この悲しみを踏まえて、平和憲法が制定され、戦争しない国になった。国民はどれほど喜んだであろうか。アジア諸国に対しては、贖罪的な意味を持つ憲法でもあった。この憲法のお陰で、76年の平和を維持していた。金メダル級の貢献である。「理科学ぶ命を守るため学ぶ 太幡琉美花 (15)」15歳の太幡さんは命を生かすために理科を学んでいる。この学びが、戦争をするための学びに変わることを危惧する。学問が軍備の増強と進展のために用いられていく傾向に、きっぱり抵抗しなければならない。「では今が平和かと問う梯梧 (でいご) 花 板倉亜澄 (51)」梯梧は、沖縄、小笠原で鑑賞用に栽培されている、5~10mほどに成長する3葉の大高木である。板倉氏は、沖縄には平和があるかと問っている。沖縄に基地を押し付け、平和とは真逆なところに追い込んでいる。平和は向こうからは来ない。Iペトロ2章11節に「悪から離れ、善を行え／平和を求め、これを追え」と書いているように、不断に平和を求め続ける中で、勝ち取っていく。敗戦記念日に、戦死者を悼み、平和を造る神の子と呼ばれる者になりたいと願う。